

恋をするなら

Minori & Makoto

清水春乃

Haruno Shimizu

termity



エタニティ文庫

目次

恋をするなら

5

子猫の回収

315

卵の温め方

331

書き下ろし番外編

永遠の何か

345

恋をするなら

プロローグ

その人物は、嵐のように部屋に入ってきて、私の前に立った。

桜井誠、御年三十三歳。桜井コーポレーション海外事業部アメリカ支社で目覚ましい業績を上げ、帰国と同時に常務に就任を果たした彼は、現社長の息子だ。自信と実力に裏打ちされた男の色気にあふれた美丈夫で、切れ者と評判の御曹司である。噂によれば、それなりに遊んでいる一方で、見合いを重ねる現実派。でもって仕事に対しては超現実派、だとか。

何それ、現実には有り得ないくらいシビアなことなの？ という突っ込みはさておき。

噂の主は、がっしりした身体を仕立ての良いグレーのスーツで包み、素晴らしくエネルギッシュな印象を無駄に撒き散らしている。

田村常務のジェントルな雰囲気懐かしい……という思いを呑み込んで、私は値踏みするような視線に取って身を晒し口上を述べた。

「本日より桜井常務付きの秘書を拝命致しました、谷口実里です。よろしくお願いします」とすると桜井は、挨拶もそこそこに傲然と言いつ放った。

「田村常務はどうだったか知らないが、俺の要求水準は高い。俺が働きやすいように差配するのが君の役目だ。海外展開する商社常務の秘書としては……」

ここで桜井は話す言語を英語に変えてきた。

『ビジネス英語ぐらいは、完璧にこなせるんだらうな』

『もちろんです。会話も文書もお任せください』

私が答えると、次にドイツ語に切り替えて問う。

『欧州にもいくつか支社がある。そこからも連絡が入るだらう』

いきなり喧嘩腰の応酬に、私の闘争心に火が付いた。舐めるな。

『ドイツ語はあまり得意ではありませんが、そこそここなせます』

そうドイツ語で答えた後、フランス語に切り替える。

『ですが、フランス語はかなり自信があります』

桜井が少し鼻白む。

『フランス語はお使いにならないですか？ まあ、現地直接やり取りをしない限りは、ビジネスは殆ど英語で事足りるようですけれど』

通じていないのを承知で、私は更に中国語に切り替えた。

『でも、今後のアジア戦略を考えれば、中国語は必要かもしれないと考えます。これはまだ勉強中ですが』

桜井の口許が、ぴくり、と引き攣ったのを確認して、にっこり微笑み頭を下げる。

「常務の求める水準に追いつけるよう、日々精進して参る所存ですので、ご指導のほどよろしくお願います」

勝った――

そう一瞬でも思ったのは間違いであった、と、今ならわかる。

その先に待っていたのは、怒涛の日々だったのだ……

1 ではまた明日

――桜井に付いて三年。

幼い頃から慣れ親しんだ姉の声が、スマートフォンごしにこう告げる。

『仕事先の幼稚園は夏休みだから、私、実里にあわせて休めるの。そっちに二、三日遊びに行ってもいい？ 話したいことが、あるの』

通話を切って、実里はため息を吐いた。こちらにあわせると言っているのに、忙しいから無理、とは言えない。話の内容も、何となく見当が付いている。スマートフォン胸に押し当て、実里は秘書課オフィスの窓に額をコツンと付けた。外界は既に暗く、窓には表情の硬い自分の顔が映っている。

「……何をしている」

「うへえっ」

実里は胸元のスマートフォンを取り落としそうになり、慌てて掴み直した。そして秘書課のドアに肩をもたせかけて立つ上司に向き直る。

「いきなり声を掛けないうください、ビックリするじゃないですか」

「こんな時間まで何をしている」

「とある方のアポの調整と下準備ですよ、もちろん」

デスクに戻り、帰り支度に取り掛かりながら実里は言った。

「常務。会食はどうされました？」

ふらり、とオフィスの中に入り込んだきた上司は、本来ならばまだ会食中のはずだ。

「フケてきた」

「はあっ？」

「狸親父が、娘の女狐を連れてきていた。危うく餌にされそうだったから、退散してきた」

あつさり言つてのける上司を、実里は片眉を跳ね上げて見た。狼おおかみが狐きつねに捕食されるなんてことが？

「まさか、またその後のフォローを頼む、とか言いに来たんじゃありませんよね？」

「さすが我が優秀な秘書、谷口実里嬢。ご明察」

目を閉じ、眉間を指でこすりながら、実里は呟つぶやいた。

「だめだめ。シワになっちゃう。こんなオトコのために美しい私の顔にシワを刻むなんて、ナンセンスよ、ナンセンス」

「しつかり聞こえているぞ」

「そうでしょうとも、聞こえるように言っているんですから」

実里はキツと視線を上げる。

「そんな年までフラフラ落ち着かないから、社長も心配されてあれやらこれやら手を尽くしていらつしやるんじゃないですか。先方への謝罪は明日私が手配しますけど、社長への言い訳はご自身でなさってくださいいねっ！」

「おお、コワ。実里嬢はご機嫌ナナメと見える」

「……それは、同じことを懲りもせず繰り返す、ダメダメ上司のせいです」

はあ、とため息を吐ついて実里は桜井を見つめた。

「女狐に見えたのは、そういうつもりでご覧になったからじゃありません？　もしかし

たら、悪い狼にうっかり食べられちゃう大人しい羊だったかもしれないのに」

桜井は、ニヤリと笑う。

「羊は好みじゃない。ちよつと爪を立てるくらいの子猫がいい」

けっ。実里は内心の苛立ちを隠してにつこり微笑む。

「いつか、ご期待に添える可愛い『子猫』が、現れるといいですね」

「ああ、気になる子猫はいるんだ。だがその子猫は、自分のことをどうやらトラだと思っ
ているらしい。ことあるごとに俺と張り合おうとする」

「……それは、難儀なことで。早くその『トラ』が、自分は『子猫』だったと気付くとい
いですね」

「全くだ」

不毛な会話は切り上げてさつさと帰ろう。実里は、鞆かばんを手にした。

「では、私はそろそろ帰宅します。明日もスケジュールが詰まっていますので、常務

も……」

「男か？」

「早く……はっ？」

「さつきの電話は男か？　お前をぼんやりさせるなんて、何を言われた？」

手にした鞆をデスクにドンと置き、実里は腕を組んだ。

「プライバシーの侵害です。私が誰と電話しようと、常務には関係ありません」
 「ここはオフィスだ。盗み聞きしたわけじゃない。聞こえただけだ」

全く悪びれた様子もなく、桜井は答える。

実里は目を瞑って、深呼吸した。落ち着け、ワタシ。このおこちゃまな上司は、ワタシをおちよくって楽しんでるだけだ。

それから、再び鞆かばんを取り、冷静を装った声で言い放った。

「私が男ごときのために、ほんやりしていたと？」

馬鹿馬鹿しい。

「ほんやりしているように見えたのなら、それは深刻かつ深遠なテーマに思いを馳せていたからです。どんなテーマかは、内緒ですけどっ！」

両手をズボンのポケットに突っ込み薄く笑みを浮かべる桜井の前を、実里はすり抜けた。

「お先に失礼しますっ」

「ふん。深刻かつ深遠な、ね。それはまた大層な。お前のその良く回る頭脳は、いつも大忙しだな。たまには休ませないと、ショートするぞ」

くくく、と笑い、桜井は片手を上げた。

「では、また明日。気を付けて帰れよ」

実里はプリプリしながら、オフィスを後にした。

帰宅するサラリーマンで混み合う電車の中で、実里は吊り革にぶら下がりながらぼんやり考える。

上司である桜井との間には、最初はものつ凄く深い溝があって、更にものつ凄く高い壁がそびえていた。のっけから「お前、使えない奴なら、とっと尻尾を巻いて出て行きやがれ！」な雰囲気で斬り込まれ、「おう！ 受けて立ってやろうじゃないの！」な雰囲気ですり返してやったのだった。

——それが一体いつの間に、こんなことに？

実里が単なるお飾りの秘書ではなく、それなりの実力も意欲もあると納得するまで、桜井は些末な案件に関しても、最終的には自分でチェックすることを怠らなかつた。正直、自分の能力をあからさまに疑ってかかれるのは不愉快である。私がいる意味ないんじゃない、と思わなくなかつたが、まあ、過去によつほど痛い目にあっているのかしらね、と放っておくことにした。

私は、私の仕事をするだけ。信頼できなくて念を入れるなら、どうぞお好きに、と。仕事上の関係を除けば、彼は実里にとつてまるつきり関心のない人物であつた。だから、その人物から殆ど関心を示されないといい状況にも、安心しきつていた。

だが、桜井付きの秘書として稼働して、半年ほど経った頃からだだろうか。実里に下りてくる仕事の量が徐々に増え、責任が委ねられるようになってきたのは。

決定的に流れが変わったのは、そう、アレからだ。

実里は、地下鉄の窓に映る自分に向かって眉を擡めた。

ある日のランチの後だった。迂闊にも、机の上に「愛読書」を放置したまま席を外してしまった。カバーはつけてあるし、外部からそうそう立ち入りがある部署でもなし。ほんの少し席を外しただけ、だったのだ。

ところが戻ってみると、桜井が実に興味深そうにその「愛読書」を手に取り、ページをめくっていた。

や・ば。実里は平静を装いつつ、桜井の手から「愛読書」——『地中海に抱かれた熱情』を取り上げた。

「何か、ご用でしょうか」

「いや。……なかなか興味深いものを読んでいるな」

「そうですね。興味がおありならお貸ししましょうか？」

「我が、冷静沈着な秘書殿がロマンス小説とは」

桜井のもの凄く面白がっている声音に、実里のスイッチがカチリと入った。口から先に生まれた、と揶揄される実里サマを舐めるな。

「これは、いわゆる『水戸黄門』です。あるいは『桃太郎侍』とか」

実里は胸を張った。

「……随分、通な時代劇を知っているな」

「祖父母が好きだったもので」

「で？ 何が『水戸黄門』で『桃太郎侍』なんだ」

「つまり、定番、定石通りってことです」

「よくわからん」

実里は頷く。そうでしょうとも。

「当初の設定や、途中がどうであれ、最終的には勧善懲悪でハッピーエンド、ということです。田村前常務も、藤沢周平や池波正太郎を愛読されていました。こちらは、もう少し捻った結末が設定されていることもありますし、文学のレベルを比べたら、両先生やそのファンに激怒されてしまうと思いますけど、効能としては同等だと考えます」

「効能？」

「サプリメントですね、つまり。ハッピーな結末がわかっているから、安心して読むことができます。ストレス解消のためのサプリメントです。読後感スッキリ！ というやつです」

ぶぶぶつと桜井は噴き出した。しかし、真面目な表情を崩さない実里を見て、笑いを

おさめる。

「なるほど」

実里は更に畳み掛ける。

「しかも、私のこのシリーズは、外国人がヒロインでヒーローです。有り得ない、と突っ込みつつ、まあ、ヤツらならそんな展開もアリか、とも流せませす」

耐え切れなかったのか、目の前で桜井は爆笑し始めた。

「お前。冷静にそんなことをよく語れるな」

「……しかも、二百ページちょいのペーパーバックで、数時間で読み終えることができるといふ効率のよさ。素晴らしい」

そして、臆面もなくそう主張したのだった。思えばその後からだったかもしれない。桜井が、実里のことを「実里」と呼び捨て、ロマンス小説のヒーローそのまんまの生活を送っているふうを装い始めたのは。誕生日には恭しく花束が捧げられ、食事や酒の誘いが言葉遊びのように口にされ……

「配置換えの希望、出そうかなー」

いっそのこと海外なんてどうだろう。もう三年経つし、海外勤務の希望も通るかも。面倒くさい実家の事情も、それであと数年先延ばしにして、そのままなし崩しにウヤマヤに、とか。地下鉄の扉から押し出されながら、実里はため息を吐く。

仕事は、大変だけど楽しい。自分にとって、秘書は適職だと思う。だけど、今までは問題なかったはずの周囲の諸々が、いつの間にか形を変えてきている気がする。そしてそれらは、どうかすると実里に向けてなだれ落ちてきそうだ。

鬱陶しい気分を振り払うように階段を駆け上がる実里の目に、出口に切り取られた夜空が映った。こんな都会じゃ星は微かにしか見えない。満天の星……もう、だいぶ見えないなあ。階段を上りきったところで足を止め、夜空を仰いだ。

お盆付近は向こうも忙しいだろうから、来てもらうのはその後の土日あたりで手を打とう。減多に帰らない親不孝者と言われるだろうけど、今年の私も忙しいのだ。

——そして数週間後。小さな台風は、実里のマンションに上陸した。

2 台風警報発令中

月曜日は、秘書課内の慌しい打ち合わせから始まる。役員によっては複数の秘書が付いていることもあり、それぞれの役員の直近の予定の確認、役員全体での予定のすり合わせ、注意事項など共有すべき情報の周知徹底が行われる。その後それぞれの役員のもとに散り、週間及び、本日のスケジュールの確認、報告事項、指示の確認が行われるのだ。

実里は、桜井コーポレーション株式会社入社時から秘書課に配属された。今年でその職も五年目を迎える二十七歳である。

最初の一年は前常務であった田村に付き、秘書の仕事を一から叩き込まれた。そして翌年、退職する田村の後任として着任した桜井にそのまま仕えることとなったのである。どうやら田村がひよつこの実里を鍛え上げていたのは、そのための布石だったようだ。

桜井は、自らが有能であるがゆえに、秘書である実里にも高いレベルでの仕事を要求し、桜井と渡り合えるだけの知識と度胸を求めてきた。常日頃から、仕事が降りてくるのを待つな、自分で作り出せ、と檄を飛ばす。実際実里は、スケジューリングなど一般秘書業務の他にも、語学力を恃まれて、海外からの情報収集なども任されている。例えば、提携を模索する外資系企業の、本国での業績を評価し、その報告書を求められる、などである。

今実里の手元のPCにも、その種のデータが表示されている。そして先程から、実里の視線は文字を追っている。なのに、そのそばから意味が零れていく。いつもならサクサクと必要な情報をピックアップしていく優秀な頭脳が、今日は全く機能していない。集中力を保つのにこんなに苦労するのは、就職して以来初めてだ。自分のミス——情報の取りこぼしが、自分だけのミスでは済まなくなることは、充分承知しているというの。……ダメだ。集中できない。実里は常務室に置かれた自分のデスクで、PC画面を睨

みつけた。

そう。小さな台風が「結婚するの」の報告だけで去っていくはずはなかったのだ。

先週末に上京した、姉の明里との話に、実里は今、頭を悩ませている。

『……こっちは、帰って来ないの?』

そう問う明里に、実里は答えた。

『今は、帰れない』

『どうして?』

実里の実家は、旅館を営んでいる。だが実里は、一度は故郷を、そしてそこで期待されるものを振り切って飛び出してきた。だけど、それから逃げ出そうとしているわけじゃない。

向き合うだけの覚悟と諦めが、まだつかないのよ。その道は、正しく私が歩むべき道なのか、確信が持てないの。何かを自分の手で掴みたいのよ、予め決められた道を爾々と歩かされるのではなく——

言いたかったのは、こういう内容だったはずだ。

しかし、咄嗟に口を衝いて出た言葉に、実里は自分でも驚いた。

『……一緒に、居たい人がいるから』

『そうなの? だったらその人に、会ってみたい』

会えるまで帰らない——。まさかそんなふうに言われるなんて。

一緒に居たいって誰のことよ。ああ、もう、この口がっ！ この、考えなしの口がっ！ 実里は自分の口許くちもとをぐい、と捻ひねった。

「どうした、実里。終わったのか」

「……アンタは横にも目がついているのか。実里は、そっと口許から手を離れた。

「すみません、急ぎます」

ちらりと視線を上げて、部屋の奥に陣取る上司を見る。感情のコントロールに長け、平素冷静沈着な印象を崩さない上司が、どういうわけか今日に限って朝から不機嫌だ。いや、表面的にはいつもと変わらないのだが、ちょっとした仕草や口調に、桜井の苛立ちを感じる。その不機嫌を汲み取れるのは、三年以上仕えている実里だからなのかもしれないが。

家にも、会社にも台風ってどういうことよ。

「……心ここに在らずなのは男のせいか」

「はい？」

桜井の低い声が響いた。

「出張帰りに羽田で見かけた」

……ああ。そんな偶然もあるのね。

明里は週末を使って、観光がてら彼と一緒に婚約の報告に来たのだ。婚約者は実里の高校時代の友人でもあったので、散々冷やかしてやったのだった。そして昨日、明里は先に帰る婚約者を羽田まで見送りに行った。桜井は、その連れ立った二人を見かけたのだらう。

「まあ、そうだと言えばそうですが、違うと言えば違う……。何なんですか、最近シスのコンの兄みためにその手の質問ばかり」

「これは俺のプライベートを晒さらしている反動だ」

「別に私は興味本位で覗のぞいているわけではなくて、業務の一環で知りたくなくとも知り得てしまうだけです」

「で、男か？」

「……聞いてませんね」

「どうなんだ」

「まあ、男と言えば男、なんですけど……」

実里は眉間に皺しわを寄せて、視線をPCに戻した。現実には存在していない、ね。

「男と言えば男って何だ。アレは今流行のニューハーフとかか」

「アレ？」

「昨日の、羽田の男だ」

「……ああ、見かけたんでしたよね」

「だから、そう言っているだろう」

要領を得ない実里の返答に、桜井の口調が露骨に苛立ったもの変わった。何でそんなに食い下がるのか意味不明なんですけど。

「アレは婚約者です」

桜井の目が驚愕に見開かれた。

「何だと？」

「婚約者ですよ、言葉のままです」

桜井が低い声で唸った。

「俺は聞いていないぞ」

「何で姉の婚約者のことを、常務に報告しなければならないんですか」

「姉？」

「常務が昨日見かけたと仰るのは、私の双子の姉とその婚約者です」

「……双子」

「そうです。双子です、一卵性の」

「……姉！」

「そこですか」

実里の眇めた視線をあっさり無視して、桜井は椅子に背を預け、何かを確認するかのように空に視線を据えた。

「なるほど。——で、何でそんなに落ち着かない？」

「そうですね、勢いで口にした言葉に窮地に立たされているというか……」

「窮地に？」

どうやら桜井は、必殺オウム返し術を発動しているらしい。

その時、実里のデスクの電話が鳴った。失礼します、と桜井に告げて、実里は受話器を取り上げる。そしてその電話を桜井に取り次ぎ、会話を打ち切った。その後は週明けの忙しさもあり、実里の「追い込まれた」状況については、とりあえず桜井の追及を免れたのであった。

あんまり深く追及されると、ボロが出そうだ。うっかりバレたりしたら、桜井は面白がって「協力してやろう」と言うタイプだ。これ以上、面倒くさい展開は勘弁願いたい。

ランチを挟んで、実里はいつもの「谷口実里」のペースをどうにか取り戻していた。らしくもなくプライベートをオフィスに持ち込んでしまったが、そんな状態をダラダラ続けることを実里は自分に許さない。にもかかわらず……

「——で、勢いでどんな言葉を口にしたって？」

午後一番の仕事の波が去ると、桜井は当然のように話題をふってきた。

「はい？」

「お前を、窮地に立たせた言葉を聞いている」

「……常務。私は、既に通常のペースを取り戻しているはずですが。業務に差し障りのあるような状態ではないと、確信しているのですが」

「そうだろうな。谷口実里は、そうでないといけない」

桜井はニヤリと笑った。

「であれば、その話題はもう無用です」

「いや、違うだろう。秘書が、一時的とはいえ業務に差し障るほどの問題を抱えている。上司としては、その解決のアドバイスぐらいはしてやるべきじゃないか？」

「ですから……」

「これは、お前のためじゃない。お前が集中できないことで、俺に影響が及ぶのを防ぐための方策だ。話せ」

「……プライベートなことなので、仕事の場に持ち込みたくありません」

「強情だな。『プライベート』を先にこの場に持ち込んだのはお前の方だ」

この、おこちゃま上司め。何なんだ、そのさり気なく高飛車な「俺が迷惑するんだ」

発言は。そんな迷惑、まだかけてないっつーの。これからもかけないっつーの。

無言の圧力を感じつつ、実里は「忙しいんです！」なオーラを放出して、デスクの上に置かれた書類を捌く。しかし、手元に影が差して見上げれば、桜井が口許に笑いを貼り付けて立っていた。

「谷口実里嬢。いいことを教えてあげよう。トラブルは起きる前に防ぐものだ。その萌芽の気配のうちに潰すことだ。話せ」

実里は諦めて、席を立った。

「大したことじゃありませんが、そんなにお聞きになりたいのなら。常務、お席にお戻りください。私がそちらに」

桜井を席に座らせるとその前に立ち、実里は話を大きく端折ったものの、「勢いで口にして、自分を窮地に立たせた言葉」と、それにまつわる経緯を少々話した。

「何だ、そんなことか」

「そう、そんなことなんです、ですから……」

放っておいてください、と続きを言うことはできなかった。

「何でハナから俺に言わない。その程度の協力は惜しまないぞ」

だから、それがイヤだから言わなかったんですってば！

* * *

目の前に座っている、ちよつと緊張気味の顔を実里は眺めた。

黒髪のレストランロボ。長い睫毛まつげに囲まれた、黒目がちな大きな目。色白の肌肌に映える、ぼつとりとした赤い唇。日頃鏡で見慣れたパーツが並ぶ、日本人形のような顔。

桜井のことを「付き合っている上司」だと簡単に紹介すると、実里にそっくりな顔の眉間に薄く皺しわが刻まれた。そして明里は、僅かな躊躇ためらいの後、意を決したようにこう口にした。

「失礼を承知でお伺いします。桜井さんは、桜井コーポレーションの社長と何かご関係が？」

「ええ。私は現社長の息子です」

「では、いずれ会社を継がれるということですか？」

「まあ、そう期待されています」

それを聞くと、明里の表情がいささか強ばった。しかし、桜井の顔から視線を外すことはない。

「実里とは、どういうお考えで交際をされているのでしょうか？」

「真剣にお付き合いさせていただいておりますが」

それが何か？ というように、少々高圧的な雰囲気雰囲気で桜井が押す。しかし、明里は簡単には引き下がらなかった。

「ですが、年齢的にも、お立場的にも、実里と真剣にお付き合いするというわけにはいかないのでは」

「それは、どういった意味でしょうか？」

桜井の威嚇いかくするような口調にも怯ひむことなく、明里は続ける。

「実里は遊びでお付き合いができるような、器用な子ではありません。ご存知かと思いますが、何事にも真剣で一途です。桜井さんもそうですが、実里の年齢も寄り道を許される時期にはないはずですよ。先を考えることができなない関係ならば、実里を中途半端に巻き込むことはやめてください」

日頃大人しい明里の、思いもかけない強気なセリフに、実里は一瞬呆気にとられた。

先程までこのシチュエーションを面白がっていたらしい桜井も、口許くちもとを強ばらせている。

「明里っ！」

実里は、慌てて明里を止めた。

「だって！ 二十七だよ！ それにウチの事情だって！」

「それはっ！ 今はまだお付き合いして間もないのだから、先のことなんてわからない

でしょう？ 側にいて、たまたま思いが通じあった。でも、それがどうなるかなんてわからない。最初からそんな先のこと考えて、お付き合いしたりしないでしよう？」

「でも！ 最初から先がないってわかっていている関係に、どうしてわざわざ足を突っ込むの？ 気持ち引き返せなくなったら、どうするの？」

「私はそんなふうにはならない」

大きくなりそうな声をどうにか抑えて、明里に對峙する。すると隣から、桜井がゆつくりと身を乗り出してきた。

「ご心配なく。仰る通り、私はそんな刹那的な付き合いをするほど若くないですから。

彼女には伝えていませんが、将来的なことも考えていますよ」

ギギギと音をさせて、実里はまやかしの恋人を振り返った。

「……でも、例えば婚約者がおられたり、立場に見合った方との結婚が暗黙の了解になっていたたりするのはいいですか？」

不安そうに瞳を揺らす明里に、桜井は大きく微笑んだ。

「私は、婚約者がいながら別の誰かとお付き合いしたりするような不誠実な人間ではありませんし、結婚を期待はされていますが、強制される立場ではないですよ」

まだ不安な顔をしている明里をその場に残して、実里は桜井と共に席を立った。仕事のスケジュールが詰まっているのだ。

「——何なんですか、アレは。やりすぎです」

「取り敢えず、ここを離れられない理由を、お姉さんも納得しただろう」

何故か上機嫌な桜井の斜め後ろに、実里は文句を言いながら従う。

「どうするんですか、こんなとんでもない大風呂敷を広げちゃって。それを畳むのは私なんですからねっ」

他人事だと思つて！ 実里はこの茶番の幕引きを思つて、ため息を吐いた。

* * *

その日マンションに帰ると、明里が夕飯を用意して待つていた。二人で向かい合つてそれを囲む。ちらり、と視線を上げてみると、明里は何事もなかったかのように黙々と箸を口に運んでいる。

何も聞かれないと、逆に何か言い訳しなくちゃいけない気になるのはどうしてだろう。

あの大風呂敷をどうやって畳むか、実里は味噌汁を睨みつけながら考える。その中に、豆腐じゃなくて答えが浮かんでいるかのように。

しかし、明里はそれに触れることなく、あっさりとこう切り出した。

「明日、帰ることにしたの」

「……そっか」

明里がわざわざここにやってきてまで確認したかったことは、きちんと確かめられたということなのだろうか？ 絶対問い詰められると思っていたのに、何だか肩透かしをくらった気分だ。

ところが、明里はこう続けた。

「あのね、実里。もう続けるのが無理だって思ったたら、何にも考えなくて帰っておいで。私が守ってあげる」

「……なに、お姉さんみたいなこと言ってるのよ」

「お忘れかもしれませんが、私は『お姉さん』ですから」

明里はちよつと胸を張る。それから、小さくため息を吐いた。

「……ごめんね、実里。実里は私が頼りないから、いつも私の分までしつかりしなくちゃいけなかった。私がそうやって頑張らせちゃった」

それは、これからもそうであることへの謝罪？

実里が味噌汁から視線を上げると、意外にも心配そうな表情を浮かべる明里がそこにいた。

「でもきつと、あのね、実里を弱くしちゃう」

「まさか」

実里は肩を竦める。

「自分を狙ってるのが、どんな猛獣かわかってないところが私は心配よ」

「わかつてるわよ。俺様で鬼畜な猛獣よ。そうね、たぶんギリシヤ人あたりが一番近いかな」

実里は、ちよつと茶化して明里の心配をやりすごそうとする。

「違う。実里は全然わかってない。あの人はとつても真剣だった。あんな立場にある人なのに、真剣だから怖いって私は思った。周りの色んなもの、巻き込んでなぎ倒して、実里を呑み込んでいそう。それを実里がちゃんとわかってないのが、もつと怖い」
いやまあ、今この段階で、これはお芝居なんですとは言えないし、興が乗ってしまった上司が、役柄を越えてしましましたとか、もつと言えない。でも、取り敢えず「今は」帰れないという言い訳がたった、ということとで良しとすべきなのかも。

だから、実里は右手を胸元に上げてこう誓った。

「明里に守ってもらわなくちゃいけないようなことには、ならないようにする」

翌日、実里の会社に合わせて家を出た明里は、駅の改札で別れる間際にこう言った。

「実里。『先がない』のと『先が見えない』のとは全然違うよ。あの人の将来が『ない』のだったら、曖昧あいまいに続けないで」

それから、そんなこと言ったって聞くような実里じゃないか、と呟つぶやくと、につこり笑っ

て手を振った。

「突然押しかけてごめん。でも、来てよかった」

明里に心配されるなんて、変な気分だ。実里はいつも心配する方で、心配される方じゃなかったから。

明里と別れたあと、通勤電車の中で実里は考える。「来てよかった」と言って微笑んだ透明な眼差し——心の機微を掬い取るような、明里の目。彼女は、私と常務のお芝居の中に何を見たのだろうか？

——ううん。そんなもの、最初から、これっぽっちも存在していない。

「お姉さんは帰ったのか」

実里が常務室に入ると、桜井がすぐに尋ねてきた。

「昨日は、私のためにわざわざお時間をつくっていただき、ありがとうございました。お陰様で姉は今朝帰りました」

「そうか」

どことなく機嫌が良い桜井を訝しく思いながら、実里はコーヒートを淹れに向かう。役員室には、それぞれ小さなシンクのある炊事スペースが付いていて、IHコンロ、冷蔵庫などが置かれている。そこでコーヒーマーカーの用意をしつつ、実里は、明里が別

際言った言葉を呟いた。

「『先がない』のと『先が見えない』のとは全然違う……」

そうよねえ。先がない関係を続けるほど、自分は愚かな人間ではない——と信じたい。それを良くわかつているはずの明里が、あんな苦しい設定でよく納得したものだ、と思う。ここは桜井の怪演に感謝すべきところなのかしら？ ……腑に落ちない部分もあるけれど。まあ、明里も帰っていったし、終わり良ければ全て良しってことで！

淹れたてのコーヒートを運びながら、実里はこの件を「済んだもの」として処理した。

ところが。この日を境に、桜井に同行する役目が、杉崎秘書課長から実里へと徐々にシフトし始めた。あまりに自然で、成り行きに無理がないせいか、周囲はその傾向にまだ気付いていないようだ。しかし当の実里は、しっかりとそれを「異変」として認識していた。

3 何かが進行中

九月に入つてすぐの、ある金曜日の朝。

本日の予定を読み上げようとしていた実里は、下から見上げる桜井の瞳が意味ありげ

に光っているのに気付いた。が、敢えてそれに気付かないふりを続ける。

「本日は、午前十時より……」

「来週から、杉崎は社長対応優先だ。こっちは実里、お前ひとりで回せるだろう」

「……午前十時より株式会社西望の社長と……何ですか、それは」

傍若無人に割り込んだ発言によって、実里は予定を読み上げることが一旦断念した。

桜井は椅子に背を預けると、頭の後ろで手を組んで、ふふん、と笑った。

「お前ひとりで対応できるものを、杉崎をかませることでひと手間余計にかける意味はあるか？ 暫くお前を連れ歩いて様子を見ていたが、何の問題もなかった。来週からはよっぽどの事情がない限り、外部への同行もお前がメインでいく」

「……」

「何だ」

「……いえ。決定事項なんです。了解しました」

四年目にして、改めて私自身の実力を認めてくれた、なんてことが？ このところ桜井と同行することが増えていたのは、私の実力を見極める意図があったからなのだろうか？ 「異変」の理由がそういうことであるならば、何も身構える必要はない。実里は安堵する。明里が変なことを言うもんだから、少し勘繰りすぎたようだ。

しかし、外に出ることが増えれば、内勤でこなしていた処理業務に皺寄せが行くこと

は明らかだ。仕事の組み立てを思案する実里に、桜井はニヤリと笑って付け加えた。

「本人にはまだ話を通ってないだろうが、営業の加藤千速をこっちで預かることになった。来年早々、瑞穂は加藤を連れてニューヨークに赴任するつもりでいる。それまでの間に、秘書業務を叩き込んでおいて欲しいそうさ。といっても、彼女は親父さんのところで秘書経験があるということだから、お前の後方支援にもなって一石二鳥だな」

唐突に桜井の口から出た同期の名に、実里は目を瞬かせた。

「それって、加藤さんの希望だとか都合だとかは、聞いてるんですかね？」

「いないだろうな」

「……ですよ。でもまあ加藤さん自身も、今回は自分を置いていくなんてこと、許しそうにありませんけど」

桜井は興味深そうな顔をして、実里を見上げた。

「あの二人は、力関係が拮抗していて面白い。どちらかが、どちらかに寄りかかり過ぎない」

実里は頷く。

「そうですね。友人であり、同志であり、恋人でもあるんです」

あの「俺様、瑞穂様」を以てしても御しきれない、千速の、生来の伸びやかさというか、輝きというか……。それゆえに尚更、瑞穂は千速に惹かれるのだらうと思う。そし

てまた千速自身も、自分の能力や個性に圧倒されない瑞穂の存在感に、安心して自分を委ねられるのだろう。

「ああいうのは、どうなんだ……」

桜井が、何か考え込むように呟く。

「どうなんだ、とは？」

「実里は側で見ていたんだろう？ 最初から、そうなるべくしてそうなったのか？」

実里は思わず、ぷつと噴いた。いや待て。この三十も半ばを過ぎたオジサマの口から、今私は、思春期真っ只中の少年のような眩きを聞いてしまったぞ。

桜井がジロリと睨んだので、実里は慌てて顔を戻し、こう答えた。

「まさか。『そうなるべくしてそうなった』なんて、どんな夢見てるんですか。少なくとも森さんは必死でしたし、加藤さんだって健気でしたよ。関係を作り上げていく上で、そんな運命任せ、人任せで上手くいくなんて幻想です。それなりの形を作り上げた人達は、それなりの努力をしているんです」

まあ当事者でもないですし、そういった経験があるわけでもないんで、あくまでも傍観者としての見解ですけどね、と付け加え視線を桜井に向けると、思いのほか真剣な眼差しにぶつかって戸惑った。

「……幻想ね」

家絡みの「食事会」という名の見合いを繰り返している桜井には、少々キツイ物言いになってしまったか。だがそれが、彼ら二人の揺るぎのない事実なのだと思う。見合いの席で眺えようとしている「嫁」と、早晚そんな「同志で恋人」なんて関係を築けるとか、普通有り得ないでしょう。そもそも、そんな活きのイイのが、見合いの席にのこのこやってくるとは思えない。そういうのは、瑞穂みたいに野に下って狩らないとね。

実里はそんな雑念を断ち切るように、途中放棄された本日の予定を告げる業務に戻った。

「本日は午前十時より、株式会社西望の社長と、中国での合弁会社設立についての打ち合わせが入っております……」

そして表面上は、いつもの日常が戻ってきた。

「やあ」

「社長！ 常務はただ今外出中ですが……」

来週からお前がメインで、と桜井には言われたが、継続業務で杉崎が同行した方が効率的な企業もまだある。そういったわけで、本日実里は内勤だ。千速が営業からこちらに異動するのはもう暫く先なので、内勤業務もそれなりにたまっている。PCに向かっていた実里は、突然現れた社長に驚いて席を立った。

「ああ、いいのいいの。わかって来てたんだから」

これ、と差し出された有名菓子店の包みを受け取ると、「その大福、美味いんだよ。どうだね一緒に」と誘われてしまった。

桜井の不在を「わかって来た」と社長は言った。実里に何か探りに来た、若しくは含みに来た、といったところか。

応接セットで寛ぐ社長のもとに、大福とお茶を出すと、案の定「まあ、君もちょっと座りなさい」と言われた。斜め向かいの席に座ると、お茶をひと口含んだ社長が「美味いな！」と呟く。

「君は——谷口君は、誠に付いて何年になる？」

「四年目になりました」

「そうか」

社長はふうつとため息を吐くと続けた。

「最近、あいつが食事を軒並み蹴っているのを知っているかね」

「……そうなんですか？」

「そうなんだよ」

それから社長はソファに背を預けると、実里を探るように見た。

「まあ、食事会という名の見合いだから、嫌がっていたのは知っていた。それでも少し

前までは嫌々ながらも顔を出して、それなりに相手を見繕おうとする努力をしていたように思う。だがこの数週間、全くだ。義理も何も、全くの拒否だ。君は、あいつが誰かと付き合っているとか、誰かに想いを寄せているとか知っているかね？」

「……いえ」

「わしは、そんなに大それた望みを持っているわけじゃない。あいつに、家庭を築いて落ち着いて欲しいと望んでいるだけだ。そろそろ、孫の顔を見せてもらってもいい頃だと思っただよ。あの森のところの瑞穂が見つけた相手は、うちの社員だっというじゃないかね。全く、誠も何をほけつとしてるんだか。自分で見つける気がないのなら、親が出しゃばってもいいだろう？」

「はあ」

そこで社長は、実里の方に身を乗り出した。

「で、だ。今週末の食事会は、これぞというお嬢さんに声を掛けたんだ。あいつに是非顔を出させたい。というより、これで決めてしまいたい。想いを懸ける相手がいないのなら、それも間違いじゃなからう？ 君に協力してほしいんだよ」

社長の熱意に押されて、実里は一枚噛むことを余儀なくされた。上手くいけばいいけれど、いかなければ後々非常に面倒臭い展開になりそうだ。正直勘弁して欲しい、と思いつつ、実里は大福を満足そうに口にする社長を眺めた。

その週末、食事を兼ねた打ち合わせに実里も同行するということで、ホテルのレストランが予約された。相手方の「企業」も、「秘書」同伴であると桜井には伝えてある。レストランの入り口で、実里は急な連絡が入ったふうを装って立ち止まった。

「先方はお待ちでしょうから、先にいらしてください」

携帯を片手にそう伝えると、桜井は頷いて案内について行く。実里はその後ろ姿を見送ると、そのまま来た道を引き返した。

ばああん、とドアが勢い良く開いて、真つ黒な空気を背負ったこの部屋の主が現れた。週明け、月曜の朝、予想を外さない登場の仕方である。大魔王降臨。何というか、ここで全く何事もなかったかのように振舞えるような、オトナな男ではないのだ、この上司は。他人を寄せ付けない冷たい空気を纏うかと思えば、激情家の一面も併せ持つ。この四年で、実里はそれを学んだ。

怒りをおつける対象——それは、恐らく実里なのだが——が不在だったせいで、不機嫌は休日を含んで持ち越されたのだろう。ピリピリした空気を肌で感じつつも、実里は、先週末あのレストランで、ウェイターに案内された先に社長と、社長肝煎りの令嬢を発見した時の桜井の顔を想像して、口許を歪めた。

しかし、こんな状況であっても、実里は優秀な秘書なのである。上司の気分左右さ

れることなく、月曜朝のルーチンワークに取り掛かる。

「おはようございます」

無言でデスクに着いた桜井の前に立ち、今週の予定並びに、本日の予定を読み上げ始めた。

「今週は、明日火曜日に関西支社への出張が予定されています。午後一時からの営業企画会議に出席しますので、九時過ぎにはこちらを……」

「携帯はどうした」

低い声が、実里の声を遮った。

今朝、週末敢えて切ったままだった秘書課支給の携帯の電源を入れてみて、桜井からの不在着信の数に軽く引いた。

——いや待て。怒りをぶつける対象は、私ではなく、社長だろう！

「うっかり充電し忘れておりました」

嘘ですけど。

「……『うっかり』ね」

「ご連絡をいただいていたようですが、申し訳ございません」

「スマートフォン番号」

そう言って、桜井は挑むような笑顔を見せた。

「は？」

「お前のスマートフォンの番号を教えておけ。緊急事態に、秘書と連絡が取れないなんてことは有り得ないだろう。——例えば、先週末のような」

はて、どんな緊急事態？ と実里は惚けた表情を浮かべて見せた。

「……常務と個人のスマートフォンで連絡を直接取り合うような緊急事態は、今までもありませんでしたし、私が常務の番号を知っていれば事足ります」

「今まではな。今後は、お前がメインで俺と動くと伝えたはずだ。移動先では、お互い連絡が取れなければ困ることもあるだろう。杉崎の番号を知っていても、意味がない」
うえ。それはその、先週末のようなことがあったら、捕まって文句を言われるってこと？ くっそー、社長め。巻き込んでくれおつてからに。大福じゃ割に合わないじゃないの。

案の定な成り行きに、内心ため息を吐く。だが仕事で必要と言われれば仕方がない。

実里は渋々自分のスマートフォンの番号を伝えた。

「あの企業はダメだ。お話にならん。秘書が最悪だった」

自分のスマートフォンに実里の番号を登録しながら、桜井が言った。ここは「どの企業でしょうか？」と突っ込んだほうが？

「……何であんな策を弄した」

実里は、肩を竦めて言った。

「常務が不在の時に、社長がいらっしゃいました。常務に『そろそろ落ち着いてほしい』と仰っていました。自分で伴侶を誂える気がないのなら、親が誂えても構わないだろう、といったことも。そういうのも、ありなのかもしれないと思いました」

桜井の視線が鋭くなった。

「俺が、そんな結びつき方を望んでいると？」

実里は首を傾げる。

「さあ。それはどうだか。でも、それを否定してはいらっしゃらなかったと思いますけど。今まで臨まれた『食事会』が、そういった意図のものであったと、ご存じなかったわけではありませんよね？」

「それはそうだが」

桜井が苦々しげに呟く。

「スタートが、たとえ予めお膳立てされたものだったとしても、もしかしたら、その中にこれぞといった方がいらっしゃるかもしれません。今後、間違いなく数十年一緒に生活することになるパートナーに何かを期待するのならば、ご自身がもっと真剣に臨むべきなのではないでしょうか」

どんなに想いあっていたとしても、上手いかなくなることだってあるというのに、

最初から片方に、想いも、上手くいかせる気もなかったら。それでは成り行きに任せて桜井の相手に選ばれた女性が、あまりにも不幸だと思う。——まあ、こういう立場の人に嫁ごうという人達にとっては、そういったことは織り込み済みなのかもしれないけれど。

「少なくとも、今まで社長は強制はしてらっしゃいませんでした。寧ろ、様々な選択肢を用意して下さっていたと思いますけど。痺れを切らした社長に、否も応もなく『これ』とあてがわれる前に、常務、心を入れ替えたほうがいいですよ」

実里は、少し茶化して言った。デスクに肘をつけて手を組んだ桜井が、ニヤリと笑う。「そうだな。俺は今まで、どういうわけだかそういうことに身が入らなかった。だが、その理由を最近自覚した」

あら。そうだったんですか。

「子猫のせいだ」

「子猫？」

「トラを装う子猫のせいだ。どうやらそのせいで、俺は想定されていた結婚への道から、気が逸れてしまいうらしい。だから、社長にはそう言って暫く猶予をもらった」

「はあ」

「狩りの時間を与えられたわけだ。当面は余計な干渉を受けずに済む」

それはつまり、ターゲットができた、ということ？

実里の「よくわからないんですけど？」な表情を見て、桜井は苦笑を浮かべる。

「まあ、いい。で、予定は？」

実里は慌てて予定を読み上げ、確認作業に入った。

桜井と一緒に企業に行く機会が増えるに従い、実里の仕事はやりやすくなっていった。それまで「声」だけで繋がっていた、他企業の役員や秘書と直接顔を合わせることで、仕事の流れが格段にスムーズになった。そしてまた、仕事の流れを自分の手の内で把握している、ということに楽しさを感じ始めていた。

それゆえ実里は当初の「あれ？」という、ある種本能的な警戒心を忘れつつあった。そう、実里はこの時はまだ、こう考えていたのだ。

桜井は、ターゲットが既に存在すると公言していたではないか。だから彼の何を警戒する必要が？ と。

従って、実里に向けられる社外の人々の好奇心に対して、過剰な反応をする桜井を持つて余してもいた。

「俺の仕事がやりやすくなったことは認める。お前も仕事がりやすくなったのだろうと思う。だが、俺は寄ってくる煩い虫を払い除ける面倒が増えた」

訪問先では先方の役員から「うちの息子なんかどうだろう？」と言われることもある。あるいは、秘書同士でアドレス交換することも。

「わざわざ常務に払い除けていただけかなくても、虫ぐらい自分で払えます。それに、そういう方面に今のところ関心ありませんから」

「……何故だ」

「何故って、それは——」

何だか、ハナシがやけにプライベートに寄ってないか？ 実里は咳払いして、軌道修正を試みた。

「それは、私の四柱推命が、まだその時ではないと示しているからです。で、今日の話で出ていた、次回の打ち合わせですが——」

「男のせいかな」

「は？」

「姉の前に出せないような関係なのか、そいつとは」

そいつ、とは、どいつよ？ 眉間を押さえ、深呼吸を数度繰り返した後、実里は呻く。

「だめだめ。シワになっちゃう。妄想癖のある上司のせいで、私の美しい顔にシワを刻むなんて、論外よ、論外」

「聞こえてるぞ」

桜井が低く笑いながら返す。

「聞こえるように言ってるんです！」

私に対して変な縄張り意識を持つ前に、常務もさっさと「子猫ちゃん」捕獲へ動けばいいのに。全く面倒な。

実里は次回の打ち合わせのスケジュール確認に取り掛かった。

4 オルキデ —— 蘭

「パーティー、ですか？」

年末近くは、多くのパーティーが企業主催で催される。桜井は今まで、そういった類のパーティーには「後が煩わしい」という理由で女性を同伴しなかったはずだ。

「私が、ですか？」

いや、別に何かを期待しているとかじゃなくて、何でまた、そんな後々が面倒臭そうなことをするのだろうという疑問。こういう時こそ、杉崎課長の方が適任なのでは？ 社長だって参加するのだろうし。

「秘書だからな。今回は、我が社が取引を狙っている企業が参加する」

「はあ」

「フランス人の取締役が出るらしいんだ」

「ああ、なるほど。通訳ですね」

「まあ英語で充分なんだろうが、彼らは母国語を愛しているからな」

仕事ならば、納得。ドレスは用意すると言われたが、実里は断った。

「……スーツというわけにはいかないんだぞ」

「わかつてますよ、それくらい。何年常務の秘書をやっていると思ってるんですか。フランス人なんですよね？ バッチリ、きつかけを作って差し上げます」

実里は、ニンマリと笑って頷いた。

当日、エスコートされるパートナーとしての立場ではないので、実里はパーティーの出席者らしい人々で賑わうホテルのロビーで、桜井を待っていた。エントランスで車を降りた桜井の姿を見つけ、出迎えに向かう。実里の姿を見て、桜井が目を細めた。

「着物か」

実里が身に着けているのは、淡いクリーム色で、裾や袖に様々な色の花が描かれた友禪の訪問着である。伊達襟と帯締めは橙色、若葉色の帯揚げをアクセントに、金糸銀糸で桐文様の刺繍が施された黒地の帯で雰囲気を締めている。

「支度が大変だったんじゃないのか」

「いいえ。色々事情があつて、これくらい自分で着られるんです」

「事情？」

その時、実里の背後から声が掛かった。

「誠。何だ、今日は連れがいるのか」

実里はくるりと向き直つて、社長に挨拶をした。

「こんばんは。本日は、秘書兼通訳として、お供を仰せつかりました」

「谷口君だったか」

あからさまにがっかりした社長が、桜井にぼやく。

「お前、意中の女性はどうなったんだね」

「今、まさに追い詰めているところですよ」

「最近わしは、お前には狩りの才能がないのではないかと思うようになってきたよ」

実里は、横を向いてぶつと噴き出した。「面白すぎる。まあ、放り投げられたエサを吟味していた時間が長かったですからね。ちゃんと「狩り」をするにはリハビリが必要なのかも……。こちらを睨む桜井の視線を感じて、実里は慌てて表情を取り繕った。

社長と桜井と共に受付を済ませ会場に入ると、既にウエルカムドリンクが振舞われていた。

「こっちだ」

桜井の手が実里の腰に添えられ、しっかりとエスコートされる。帯だから仕方ないと思いつつも、手の位置が気になる。

「常務。ちゃんといきましますから、その手は必要ないです」

「なんだ、気になるのか」

「……別に。ただ、パートナーでもないのに変に誤解されたら、常務が困るんじゃないですか?」

「ああ、構わん」

「構わんって……」

そうこうしているうちに、年配の男性達のもとへと辿りついた。既に顔見知りではあるのだから、和やかに挨拶が交わされる。少し後方で控えていた実里に、その中の一人が熱烈な視線を向けてくる。よっしゃ。ジャポニスム万歳。実里は心の内でガッツポーズを決めた。会場に着物姿は、実里ひとりようだ。

ベルナル社はフランスに本社を置く、香りに関する日用品を取り扱う会社である。日本には支店ではなく、本社機能を持たせた法人を設立し、本社からフランス人の取締役を派遣している。

「ステキナ キモノ デスネ」

実里が秘書と紹介されるや否や、ナタン・ベルナルという取締役は、実里への――

というよりは、実里の身につけている着物への興味を隠すことなく近付いてきた。外国人にとつて、着物はいたく興味を惹かれるものらしい。

――あんな平面的な物が、何故こうも立体的になり得るのか?

――ボタンをひとつも使わずに、紐^{ひも}だけで着ているとは!

――この繊細な美しい柄はどうだろう。金糸銀糸の細やかな刺繍^{しじゅう}ときたら!

似たようなシチュエーションで、過去に何度となくこんなふうに見線と言葉に向けられてきた。

『ありがとうございます。着物は日本の誇る文化のひとつです』

『おおっ! 日本人形のようなあなたの口から、フランス語が飛び出すとは思いませんでしたよ』

ひとしきり、実里がフランス語を身につけた経緯や、フランス語の美しさ、着物についての話をする。その後、さり気なく話をビジネスに舵^{むき}取りした。

『私は、御社のアロマグッズを長いこと愛用しているんです。特にローズの香りが好きで』

『そうですね! それは嬉しい』

『同じローズをうたうものでも、他社の製品は御社のものとは香りがどこか違うんですよ』

『それはそうですね。我が社の製品は原材料に対するこだわりからして違います』

ナタンが胸を張った。

『もちろん、そうなのでしょね。気に入っているんですが、なかなか日本では手に入らなくて』

『そうですね。今はまだ一部の輸入業者が扱っているくらいなのでね』

『今日はベルナル社の方もいらっしやると伺って、御社の製品を日本でももつと手に入れやすくしていただけるように、是非お願いしようと思つて参りました』

『おや。君は営業もするのかい？ 先程秘書だと紹介されたが』

ナタンは少しそっくり返つて実里を見下ろした。実里はくすりと笑う。

『若干、私情を挟んできます』

『ふむ』

少し首を傾げて、彼は実里を見た。

『我が社の……オルキデはどうだろう？』

青灰色の瞳が、実里を探るようにきらりと光る。

オルキデ——蘭？ 蘭の香りはラインナップされていただけだろうか？

『すみません、オルキデは試したことがあります。おすめの香りなのでしょいか？ ですが、ローズの次に気に入っているのはオランジュ（オレンジ）です。ラヴァンド（ラベンダー）よりも爽やかで』

くつくと笑うと、ナタンはウインクした。

『我が社の製品の愛用者を連れてくるとは、桜井コーポレーションはかなり本気なのだね。オルキデはまだ商品化されていないのだよ。サンプルが出来上がったら、是非君に送らせてもらおう』

ナタンは実里の手を取り、軽く唇を寄せた後、肉厚の手でぼんぼんと叩いた。

『では、そうだね。川崎君に話してみるかね？ といつても、桜井常務は既にアプルーチしているみたいだが』

『お口添えいただければ、大変光栄です』

試されたのだ、と気付き、実里の背筋を冷たい汗が伝った。この柔らかな印象を与えるロマンズグレーの紳士は、実里が方便を使ってまで取り入ろうとしているのか、さり気なくカマをかけたのだ。

実里は密かに、千速に感謝した。ベルナル社のことを話した時に、アドバイスされたのだ。リサーチを怠るべからず。知ったかぶりするべからず。自分の知り得ることで勝負すべし。

——でも、もしかしたら、私の驕りが取引をダメにしていたかもしれない。ベルナル社日本人の社長、川崎と熱心に話す桜井の姿を眺めながら、実里は青褪め、唇を噛みしめた。

ナタンと共に再び桜井らの集団に加わった時、桜井は一瞬眉間に皺を寄せ、実里の顔をじっと見つめてきた。

が、ナタンが川崎社長に話しかけ、ビジネスに——桜井が望む方向に——話の流れが向かったので、意識をそちらに振り向けたようだ。実里も本日の期待された役目を果たすべく桜井や社長とナタンの間の通訳を務めたが、先程自分を襲ったひんやりとした恐怖はまだ覚めやらない。自信を持ち続けるために、努力を怠らない。根拠のない自信は、持たない。そう自分に言い聞かせてきたというのに。驕らず謙虚でなければ、あつという間に足を掬われる。

話は、目を改め場所を設定して商談をしようという流れになったようだ。実里はどうやら「きつかけ」にはなつたらしい。結果オーライだけれど、手放しでは喜べない。

和やかな雰囲気のまま、日程の調整はまた後程、とベルナル社の人々と別れ、実里は社長と桜井の後に続いた。

「——どうした。さつきから顔色が悪い」

実里は、無意識に胸の前で固く手を組み、唇を噛みしめていたようだ。ふいに話しかけられて、桜井を見上げた。

「いいえ——いいえ、何でもありません」

腕に手を添えられて、会場の隅に連れていかれた。

「何か言われたのか？ 何があった」

「何も。何も言われてません。普通に、ベルナル社のアロマの話をしていただけです」

桜井は、実里の顔を探るように見つめる。

「——帰るか？」

「いいえ。大丈夫です」

仕事で来ているのだ。自分がフォローすべき上司に心配させてどうする。いい気になつて危ないことをしてしまった。迂闊だった。だけど、同じ失敗は繰り返さない。実里は、一瞬外した視線を再び桜井に向けて、繰り返した。

「大丈夫です」

再び社長と合流すると、口許を緩めた社長が尋ねてきた。

「ナタン氏をどうやって口説いたんだね？ 彼は、ああ見えてなかなか気難しいという評判なんだよ」

う・わ。ほんとに危ない橋を渡つたんだ……。実里は強ばつた笑みを貼り付け、社長に答えた。

「アロマのお話をしました。実際いくつか手に入れて試してみたので、その感想を……」

桜井が、驚いたように呟く。実里は首を傾げ、逆に尋ねた。

「今回、是非取引したい企業がベルナル社だと伺っておりました。秘書兼通訳のお役目でお供することはわかっておりましたが、状況から言えば、営業のお役目も期待されているのではないかと思っただけですが」

「いや、確かにその通りだが……」

「ベルナル社の主力商品で日本で手に入りにくいもの、尚且つ、人気の出そうなものといったら、アロマじゃないかと。容器が白い陶器で高級感もあり、デザインが美しいんです。香りも、もちろん素晴らしいのですが」

社長が面白そうに実里の顔を見た。

「谷口君は秘書としても一流だが、営業もいけそうだね。誠の下につけておくのはもったいない」

それを聞いた桜井が、鋭い口調で抗議する。

「冗談はやめてください。ここまで仕上げたのは私なんですから」

いや、アンタに仕上げられたわけじゃないですけど。色々とけしかけられて、頑張らされたことは否定しないにしても。実里の眉間に皺が寄った。

思いのほか強い調子の抗議を受けて、社長が桜井の顔をまじまじと見つめ、何やら思案している。一瞬その視線が実里に流れ、再び桜井に戻った。

「……そういうことか？」という呟きが聞こえたが、「そういうこととは、どういうこ

とですか？」という実里の疑問は、口にされることはなかった。何故なら、ここで以前「うちの息子はどうかろう」と実里に尋ねてきたことのある、共創商事の専務が登場したからである。

「桜井社長、お久しぶりですな。常務と谷口さんも、先日はどうもどうも」

ニコニコと笑いながら、社長や桜井と挨拶を交わしつつも、彼の視線は実里にロックオンされている。嫌な予感がするんですけど。

「ここでお目にかかれるとは運命を感じてしまうね。今日は、私の息子も来ているんだよ。稔、こつちだ」

振り返った実里に、にやりと笑って男が言った。

「市松。久しぶりだな」

実里はその男を指差し、口を半ば開いたまま固まった。

「お前、人を指差すとは、失礼じゃないか」

ダークスーツをびしりと着こなした長身の男は、実里の手をペチと軽く叩くと、顔を覗き込んで言った。

「変わってないね」

「……いや、アナタは変わりすぎ」

山科稔は、同じテニスサークルに所属していた、実里の大学の同級生だ。お調子者で

自堕落で、でも憎めない人気者。しかし実里は、この男が苦手だった。

「俺はどうせ、ジイさんの会社に入るから」が口癖で、それを免罪符に色々なことから逃げていくように見えたのだ。男なら、何故、自分の力で勝負しない！と、十代ならではの潔癖さで、実里は常々思っていた。

だというのに。

実里は目を瞬かせた。会わない数年の間に何があったか知らないが、今、実里の前に立つ男は、当時の投げやりな雰囲気が一掃されて、経験に裏打ちされた強かな自信を纏っているように見えた。

「変わってなくて嬉しいよ」

「……それは、妙齢の女性としては、喜んでいいのか迷うセリフだね」

山科はクスリと笑って言った。

「もちろん褒め言葉さ。市松が変わっていたら、俺のポースターがなくなる」

ポースター——北極星？ 道標、ってこと？

「何だ、それは」

実里は噴き出した。

「みのる」と「みのり」は聞き違いやすい。二人をはっきり区別するために、サークル内で実里は、市松人形のようなその外見から「市松」と呼ばれていた。懐かしい仇名だ。

「お前、谷口さんと知り合いだったのか？」

専務が目丸くして、山科を見る。

「知り合いも何も、大学のサークル仲間ですよ」

「何とー！」

旧交を温めたいところだが、実里は絶賛仕事中の身だ。実里を待つ社長と桜井を振り返り、視線で謝った後、山科に告げる。

「ごめん、稔。私、仕事中文の。機会があったらまた話そう」

そう言って、専務に軽く会釈し、慌てて身を翻そうとすると、手首を掴まれた。

「待って。俺は、市松の最後のセリフを覚えてるよ、ちゃんと」

「最後の？」

その時、桜井の鋭い声が割って入った。

「実里っ！」

実里は、はっとして山科の手をほどき、険しい顔をした桜井のもとに走った。

「すみません」

「……行くぞ」

桜井の低い声に促されて、後ろを振り返ることなくその場を後にする。

「……『実里』？」

見送る山科の眩くらきに、実里が気付くことはなかった。

* * *

パーティーが終わり、社長を乗せた車をホテルのロータリーで見送ると、実里は、ほとと息を吐いた。

「常務もお気を付けて」

隣に立つ桜井にそう告げると、腕をぐいと掴まれ、目の前に停まった運転手つきの車に押し込まれた。

「馬鹿か。そんな格好をしているお前をひとりで帰せるか」

「あのでも、タクシーを使いますから」

「もう乗ってるんだから、大人しく送られたらどうだ」

「乗ってる」じゃなくて「押し込んだ」んでしようが。乱れた裾すそと襟元を整えながらそう思ったが、今は精神的にどんより疲れていて、まともに桜井の相手をする気力がない。それにどうせ、さっきの状況の説明を求められるのだから。そういうのは、早く済ませてしまいたい。

「……ありがとうございます」

突っかかられると身構えていたのか、やけに素直な反応を返した実里を窺うかがう視線を感じる。車が走り出すと、実里に家の方向を指示させ、桜井は座席に深く身体を沈めて尋ねてきた。

「何があった」

早速ですか。実里はふっと強く息を吐き、ちらりと桜井に視線を走らせた。

「そんな怖い顔しないでください。大したことじゃありません。ナタン氏に試されたんです」

「試された？」

「オルキデ——蘭らん、です。ベルナル社のアロマキャンドルは、フランス土産みやげで頂いたりすることもありましたし、今回のターゲットだと伺って、自分でもいくつか取り寄せてみました。私がアブローチするなら、そこだと考えましたので」

「なるほど」

「ローズは素晴らしいんです。でも、それはまあ割と知られている情報で、もう一歩踏み込むならば、別の香りも試しておくべきだと。オレンジとラベンダー、ジャスミンやサンダルウッドは使ってみたのですが」

実里は桜井に向かって小さく微笑んだ。

「『蘭はどうか』と聞かれました」